募集要項

● **内　容**　随筆（エッセイ）
・テーマは自由（人とのふれあい、家族や旅の思い出、ふるさとへの思い、世の中の動きについて考えたことなど）

● **応募資格**　高校生以上

● **応募料**　無料

● **締　切**　〈一般の部〉　令和2年10月31日（土）　当日消印有効
〈高校生の部〉　令和2年12月15日（火）　当日消印有効

● **発　表**　令和3年2月下旬ごろ
（入賞者に直接通知するとともに、福井新聞紙上にて発表します。なお、発表後、ホームページ上に入賞者名を掲載します。）

● **著作権**　入賞作品の諸権利は、主催者側に帰属するものとします。
（入賞作品は、本文学賞の趣旨に沿って、入賞作品集や新聞、主催・共催団体等のホームページ・広報誌等で公表されます。）

● **賞**

〈一般の部〉	最優秀賞	1名	30万円
	優秀賞	若干名	5万円
	U30賞	1名	5万円
〈高校生の部〉	最優秀賞	1名	10万円（図書カード）
	優秀賞	若干名	3万円（図書カード）
	佳作	若干名	5千円（図書カード）
	奨励賞	20名程度	3千円（図書カード）

● **審査委員**　特別審査委員長　出久根 達郎（作家）
〈プロフィール〉
1944年茨城県に生まれる。
1992年『本のお口よごしですが』で講談社エッセイ賞、翌年『佃島ふたり書房』で第108回直木賞、2015年『半分コ』で芸術選奨文部科学大臣賞を受賞。日本文藝家協会前理事長。現在、副理事長を務める。主な小説に『おんな飛脚人』『漱石センセと私』、エッセイに『古本綺譚』『作家の値段』『本と暮せば』など著書多数。

委　　員　増永　迪男（山岳エッセイスト）
中島 美千代（作家）
大河　晴美（仁愛大学人間学部教授）
菊野　昭彦（福井新聞社文化生活部長）
冨澤　宏二（福井県高等学校文化連盟代表）

応募先
〒918－8113　福井市下馬町51－11
風花随筆文学賞実行委員会事務局（福井県ふるさと文学館内）
TEL（0776）33－8866　Eメール：kazahana@pref.fukui.lg.jp
URL：https://www.library-archives.pref.fukui.lg.jp/

中面に入賞作品を掲載しております。

風花とは雪が舞い散る様子を花に例えたもの。この文学賞は、福井県出身の作家津村節子氏の随筆集『風花の街から』にちなんで始まりました。

《主催》風花随筆文学賞実行委員会　《共催》福井新聞社、学校法人 福井仁愛学園　《特別協賛》公益財団法人 げんでんふれあい福井財団　《後援》福井県、福井県教育委員会、東京都荒川区（おしどり文学館協定締結）、FM福井

一般の部

～入賞作品の紹介～

第二十三回 ふくい風花随筆文学賞
最優秀賞・福井県知事賞

紅白饅頭とクリームブリュレ

奈良県 中尾 なつみ

私が卒業式の紅白饅頭を受け取ったのは、賞味期限が過ぎてからであった。もう切れてるけどええか、と職員室の向かいの部屋で困った笑顔の先生に訊かれたのを覚えている。饅頭は遠慮して、私はそこで卒業証書を受け取った。

卒業式を欠席した日、母は私を外食に誘った。行き先は近所にある、私が行ったことのないパスタ屋さんだった。母曰く、そこは無愛想だが腕の立つマスターが一人で切り盛りしているという。喋りながら食べている客を好まず、温かいまま料理を食べてほしいというこだわりがあるそうだ。私はなんだか緊張してしまったが、美味しいから、と母に背中を押され、二人で向かった。お母さんは卒業式に行けなかったことをどう思うのだろうかと、考えながら。

小学校頃に毎日通った商店街の中に、思いがけずその店は、あった。店先の小さなキャンバスには本日のメニューが書かれている。隠れ家のようにひっそりとした店内のカウンター席に座り、母が注文する。お客さんは私達だけで、静かな空気の中で料理を待った。

初めに出てきたのは、色とりどりの海藻ビーズが乗ったサラダと、バスケットに入ったガーリックトースト。この粒々はなんだろうね、と母と顔を見合わせながら、パンを口に運んでいると、すぐにパスタが出された。クリームソースがたっぷりとかかった出来立てのパスタはとても美味しく、冷めないうちに食べようと夢中で食べた。「紅白饅頭、食べたかったなあ」などと悔やむ食い意地は、胃袋と共に満ちていった。

ごちそうさま、と言って皿が下げられるのを眺めていると、マスターが声をかけてきた。

「新しいデザートを夜に出そうと思っていて。よかったら、食べてもらえませんか。」

私は大変びっくりしながら頷いた。一体、何が出てくるのだろう?入店したとき緊張でどきどきしていた胸は、期待の鼓動でいっぱいだった。

「クリームブリュレです。」

目の前に差し出されたのは、キウイとイチゴが添えられ、ホイップクリームの上には銀色のアラザンが乗せられた、クリームブリュレだった。とても可愛らしく盛り付けられたスイーツに目を見張り、恐る恐るスプーンを入れる。すると、かつん、と音が鳴った。湖に張った氷のように、あぶられたカラメルが表面を覆っているのだ!クリームブリュレを食べたのは初めてで、なんて幸運だろうと喜びながら、味わった。

ありがとうございました、と言って会計を済ませる。

「こちらこそ、また来てください。」

マスターは笑っていた。

「あんなににこやかなのは初めて見たわ。きっとなっちゃんが料理をすぐに食べて、『ありがとうございます』『ごちそうさまでした』言うて行儀よくしてたからやろうね。」

帰り道に母は驚きつつも褒めてくれた。

その日の夜、布団に入ると今日のクリームブリュレがまぶたの裏に像を結んだ。初めて見た砂糖の焦げ目を思い出すと笑みがこぼれた。なんて素敵なサプライズだろう、いいこともあるものだなあ。思い出すと、涙がするりと目の横を流れていった。

私が卒業式に出なかったのは、高校生活が辛かったからだった。二年生になり高校を休みがちになるにつれ、私はずっと間違った道にいるのだと感じていた。私が母に悩みを話すと、母がこう呟いたこともある。

「なっちゃんが卒業式に出るところを見たら、私は泣くと思う。今まで辛かったなあ。」

そう言った母が、卒業式を欠席する旨を電話しているとき、私は自分のことが情けなくて大嫌いだった。高校のことも、全てが憎い訳ではなかったので、悔しかった。

クリームブリュレは、受け取ることのできなかった卒業証書のようだった。「何かしてもらったら『ありがとう』ってちゃんと言うんやで」と教えてくれた中学の頃の友達。「いただきます」と欠かさず言う姿を褒めてくれた先生。彼らとの出会いの上に立って私が生きてきたことを、見てくれている誰かがいる。その気づきは、今もなお、私の心に残っている。

私が進学した大学では、食堂のクリームブリュレが大人気だ。運良く手に入った日には、カチコチになったカラメルを割るたびに、あのパスタ屋さんを思い出す。

第二十三回 ふくい風花随筆文学賞
最優秀賞・福井県知事賞

あなたとの会話

福井県立大野高等学校　澤田　晴

「やっぱり濃いな。」私は祖父の作った味噌汁を片手に思う。決して言わない。私が見ていたクイズ番組を勝手に高校野球に変えてしまった祖父を睨むように見つめて、心の中に言葉をしまう。

今年の八月初日。両親と妹が出かけたため、私と祖父母の三人だけでその日を過ごすことになった。昼に起きた私は祖父の濃い味噌汁を飲み、リモコンを支配されたことに腹を立てながら階段を上り自分の部屋に向かった。その時、壁に飾られた一枚の写真が目に入ってきた。祖父に抱っこされるのを嫌がっている私の写真である。あまりにも私の記憶どおりの様子だったので、おかしくなって、もっとそんな写真を探してみたくなった。

さっそく棚からホコリだらけのアルバムを引きずり出して、ぼーっとページをめくっていく。さっきのこともあって、祖父と私はいつからあまり話さなくなったのか気になった。祖父と私との写真は数枚しかなかったが、意外にも思い出はたくさん見つかった。祖父は私がいるのにお風呂の電気を消したり、酔っ払って私をからかって泣かせたりと、あまり感動的な思い出はなかった。私も人のことを言えず、祖父がお酒を飲みすぎると母に怒られるのを知っていて祖父のいない間にゴミ箱にあった缶ビールを机に並べたり、花に水やりをしている祖父を狙って二階の窓から消しゴムを投げたりしていた。思い出の中でもおかしな祖父と孫だが、なんだか今より暖かいものを感じた。もっと私たちの間には賑やかな会話があった。祖父との会話がなくなったのは誰のせいだろう。決して私は祖父を避けているわけではない。しかし昔とは何か違う。考えれば考えるほど自分に思い当たる節があって自分の反抗期のようなものを感じて恥ずかしくなった。そして、祖父の気持ちを考えて胸が苦しくなっていった。

「おーい、晴!!」と、私を呼ぶ祖父の声ではっとなった。下へ降りると、祖父に夕飯のお惣菜を買いに行こうと誘われた。いつものようにいらないとは言えず、一緒に行くことにした。

土木の仕事をしている祖父の車は泥だらけで、シートには煙草の匂いが染み付いている。そのうえ、祖父はふわっとしたブレーキの踏み方なので私は最初から祖父の車では横になると決めている。家を出た頃にはもう日が沈みそうだった。クーラーをつけているのに窓を開けたままの車は、淡い赤色の空の中を走る。窓から見える電線と立ち並ぶ屋根の雰囲気で私は疑問に思ってしまった。「なんでそんなに遠回りするの?.まっすぐ行こうよ。」と言うと、「じいちゃん信号嫌いなの。」と、頭をかきながら少し強い口調で祖父は言った。私はもう一つ何か言おうとしたが、蝉時雨が私たちの会話に終止符を打った。

うまくいかない祖父との会話にモヤモヤしながら夕食を食べた。私は濃いと分かっている味噌汁を茶碗いっぱいにすくって、祖父に見せつけるかのようにそれを飲んだ。リモコンは誰の手にもなく、ただ静まりが食卓を襲った。

その後、庭のデッキに出た祖父についていって私も外に出た。煙草と焼酎の入ったグラスを片手に祖父は不思議そうな顔で私を見た。早くモヤモヤをかき消したいという思いからか、「じいちゃんてどうやってばあちゃんに告白したの?」といきなり聞いた。自分が言ったとは思えない一言だった。「そんなの覚えとらんわ。でもばあちゃんは勉強もできたし、べっぴんさんやったざ。」と少し笑いながら祖父は言った。「ばあちゃんへのラブレターに『あなたに変してます。』って間違えて書いたんでしょ。」と、私は昔母から聞いたことを使って攻撃した。すると祖父は大声で笑った。私はびっくりした。「そんなこともあったかもな。」と祖父はにっこり笑って言った。気づくと祖母も網戸越しでクスクス笑っていた。少し恥ずかしくなったが、モヤモヤは吹っ切れた。それから祖父の昔話をたくさん聞いた。祖父は昔からやんちゃだったらしい。どの話もやっぱりおかしくて、気づいたら三人でずっと笑っていた。

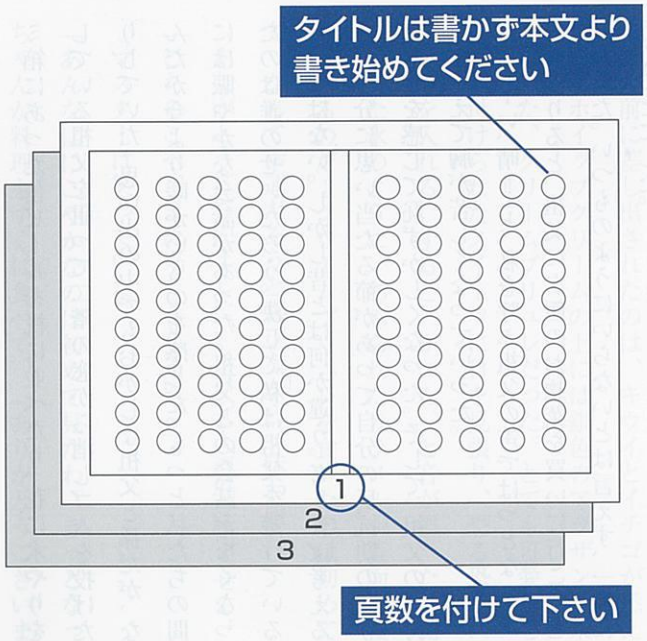
少し静かになって、祖父の焼酎の氷の音が心地よくなる中、私はただ一人ウキウキしていた。久しぶりに祖父の笑顔が見れた。会話なんて取り戻そうと頑張るものじゃないなと思った。そもそも家族の会話を「会話」なんて堅苦しいもののように扱っていたことから私は間違っていた。そんなことより、ちらちらと顔を出す祖父の優しさに感謝を伝えよう。「今日はお味噌汁ありがとう。少し濃かったけど。」

蚊取り線香のいい香りは、私が家に入ろうとするのを引き留める。ゆっくりと流れる雲から月が顔を出す。それは不恰好で決して満月ではないけれど、確かな優しい光で私たちを包んでいた。

風花随筆文学賞 応募規定

400字詰原稿用紙 ―5枚以内―（ワープロ・パソコンでも可）

- A4判400字詰原稿用紙3～5枚以内（Wordなどワープロソフトで作成した原稿も可ですが、20字×20行で3～5枚以内とし、原稿用紙の書き方に準じてください）
- 作品は日本語で書かれた自作、未発表のもの。新聞、雑誌、同人雑誌、インターネット上などに既に発表したもの、他の文学賞に応募したものは不可とします。
- 作品とは別に応募票または表紙を付け、題名、氏名（ペンネーム可ですが本名・ふりがなも併記してください）、性別、住所、職業または学校名、年齢または学年、電話番号、公募を知った方法を明記してください。
- 応募は直接福井県ふるさと文学館カウンターへ持参するか、郵送または電子メールに限ります（電子メールによる場合は、作品を別ファイルで添付してください。PDF可）。
  ※応募作品の返却および選考経過についての問合せには応じません。



＋

※必要事項を応募票（リーフレット・WEB入手）か表紙に記入し、添付してください。

【必要事項】

❶ 題名
❷ 氏名（ペンネーム）
❸ 性別
❹ 年齢（学年）
❺ 職業（学校名）
❻ 住所
❼ 連絡先
❽ 公募を知った方法

（切り取り線）

応募票					
❶題　名					
ふりがな ❷氏　名			ペンネームを使用する場合	ふりがな ペンネーム	
❸性　別	❹年　齢	（学　年）	❺職業（学校名）		
❻住　所	〒				
❼連絡先	Tel　（　　）		Fax　（　　）		
❽公募を知った方法	・ポスター、リーフレット等 ・新聞、テレビ、ラジオ、雑誌		・福井県ふるさと文学館ホームページ ・その他（　　）		